

# 聾学校幼児児童生徒の人工内耳装用の現状と学習等の 状況に関する研究(1)

企画者	澤 隆史（東京学芸大学特別支援科学講座）
司会者	澤 隆史（東京学芸大学特別支援科学講座）
話題提供者	鄭 仁豪（筑波大学人間系） 庄司和史（信州大学学術研究院総合人間科学系） 左藤敦子（筑波大学人間系） 茂木成友（東北福祉大学教育学部） 斎藤友介（大東文化大学文学部教育学科） 澤 隆史（東京学芸大学特別支援科学講座）
指定討論者	鹿嶋 浩（全日本聾教育研究会・愛知県立岡崎聾学校）

KEY WORDS: 聾学校、人工内耳、幼児児童生徒

## 【企画趣旨】

全国聾学校長会（2020）の報告によると、聾学校において人工内耳を装用している幼児児童生徒の割合は、全体の30%以上に達している。特に幼稚部や小学部では割合が高く、両耳装用の幼児児童も増加傾向にあるなど、スクリーニング検査の普及に伴って、今後更に増加することが予想される。H29 年告示の新学習指導要領では、学習での言語活動の充実や言語能力の育成、外国語教育の充実等、教育内容の取扱いについて一層の充実を図ることが示されている。これらの諸点に関して、従来、聾学校では多様なコミュニケーション方法の活用やきめ細やかな教科指導を通じた実践がなされているが、人工内耳を装用した子どもの増加に伴い、個々の発達や学習状況の違いに応じた指導の一層の工夫が求められる。本シンポジウムでは、2019 年に実施した全国調査の結果に基づき、聾学校の幼稚部・小学部・中学部における人工内耳装用児の言語活動および学習・生活の現状と課題について報告するとともに、今後の教育・支援の在り方について展望したい。

## 【話題提供者の趣旨】

### 1. 研究概要と結果（鄭）

本研究では、上述の研究の背景と課題を踏まえ、聾学校幼児児童生徒の人工内耳装用の現状と言語活動を始めとする学習活動の現状と課題を明らかにすることを目的とし、人工内耳装用状況、言語活動の現状、言語指導の内容と工夫について、聴覚障害教育関係の研究者10名と教員11名の計21名の研究チームによるアンケート調査を行った。その結果、107校1,311名のデータが集まった。

### 2. 幼稚部の現状と学習状況（庄司・左藤）

両耳人工内耳装用の幼児は、重複障害のない子どもで5割、ある子どもで3割を占め、補聴器の使用を含めると両耳装用の子どもが多かった。生活や学習の場面で使用しているコミュニケーション方法としては、音声の割合が高いが、幼児の場合、子どもの使用している方法をベースとしながら、意図的に音声を取り入れた学習活動を行っていることがうかがえる。“音への気づき”について良好な幼児が大半を占めたが、言語音の聞き取りや傾聴態度の面では、良好な幼児は4割程度であった。言語活動面での評価が低い子どもが多く、語彙や言葉の概念形成、助詞、文表現力における課題が指摘された。幼児の場合、重複障害のある・なしを含めて発達の個人差が大きく、今後は定型発達児のコミュニケーションや行動の特徴に照らした検討が必要であると考えられる。

### 3. 小学部の現状と学習状況（茂木・斎藤）

人工内耳装用児が使用する主なコミュニケーション方法は音声と手話が多く、学習指導時でも音声の割合が顕著に高かった。この結果より、手話等の視覚的方法を用いながらも音声を主とした指導が行われていることがわかる。学習・生活に関しては、聴覚活用、学習への態度、学校や家庭での生活・行動面で良好な一方で、言語活動、学業成績、コミュニケーション能力の面では課題を有していた。特に言語活動における文法力や文章理解力の課題が指摘され、ことばの習得における困難が学業成績にも影響していることが考えられる。さらに聞き手に分かるような話し方、聞き漏らしへの気づきが難しく、傾聴態度の育成を含めた指導上の課題が指摘された。補聴器装用児に比して聞こえの状態が良好な例が多い一方で、言語力や思考力の向上、聞こえにくいことに対する自己認識や障害受容の力を育てることが課題となる。

### 4. 中学部の現状と学習状況（澤）

全体的に音への反応が良好で、音声を優位なコミュニケーション方法とする生徒が多い一方で、言語聴取や読み書きなどの言語活動や基礎的な学力の形成において多くの課題が指摘された。人工内耳のメリット生かしつつも、多様なコミュニケーション方法や視覚教材を活用した指導が求められる。また学習時の注意持続、状況に応じたコミュニケーション、聞こえにくいことへの自己認識など、対人面での行動や障害認識の意識が育っていない生徒も多く、それぞれの生徒に応じた指導上の工夫がなされていた。発達障害を併せ有する生徒も含めて、状況認識や自己・他者理解の力を育てていくことが課題となる。

## 【指定討論者の趣旨】

今後の聾学校における指導・支援の展望（鹿嶋）

話題提供の内容から、特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から中学部に在籍する人工内耳装用幼児児童生徒の人工内耳装用の現状と学習等における効果や課題が提示された。

指定討論では、聾学校の立場から聾学校の人工内耳装用幼児児童生徒の状況について再確認するとともに、今後の聾学校における人工内耳装用幼児児童生徒への指導・支援について考えたい。

（文献）全国聾学校長会編（2020）聴覚障害教育の現状と課題。

（SAWA Takashi, CHUNG Inho, SHOJI Masashi, SATO Atsuko, MOTEGI Masatomo, SAITO Yusuke, KATO Yasuyoshi, KASHIMA Hiroshi）